

幼稚園生活への適応について (1)

——入園当初の適応を中心にして——

吉村智恵子・望月久乃

A Study on Social Adjustment in Kindergarten Children (1)

—— With Special Reference to the First Month after Entry ——

Chieko YOSHIMURA and Hisano MOCHIZUKI

問 題

適応は、個人内要因と環境要因の相互関係から、その様相・程度に違いがみられることが、明らかにされている。幼児が、新たに幼稚園や保育所のような集団保育施設に入園・入所してからみせる変化の過程を、適応という観点から考える場合にも同様のことがあてはまる。すなわち、集団生活の場への適応において、幼児のもつ条件を個人内要因とし、その他の条件を環境要因として考えていくということである。そこで、集団保育施設での適応の個人内要因と環境要因がそれぞれ何であるか、それらがどのように関係しあっているかを明確にすることにより、幼児の集団生活への適応過程において、幼児のもつ要因に働きかけたり、幼児自身の要因に周りの環境をより適したものに变化させていくことが可能になる。

平井等 (1974) は、幼児の集団的適応過程を外面的適応 (集団や斉一活動への順応) と内面的適応 (活動への興味や関心の強さ、積極性、満足度など) の両面から検討している。この結果から森上 (1980) は、「保育者の設定した斉一課題やクラスの集団生活にどれだけ順応できるかということが、子どもに対する評価の基準になりやすい」ことを指摘し、「個人適応と集団適応とが調和的に発達することが必要」であり、「幼いほど、(中略) 個人適応をはかり、それを基盤にして、徐々に集団適応の方向に進ませる必要がある。特に乳児や幼児前期の子ども、入園当初の子どもなどは、個人適応がはかられていても集団適応は十分ではない場合が多い。」としている。さらに、集団適応も個人適応もはかられていない「未成熟な行動」を示す子どもに対する配慮の必要性も述べている。この入園当初に集団適応がはかられていない幼児、あるいは集団適応も個人適応もはかられていない「未成熟な行動」を示す幼児は、保育内容や保育者がどのようなようであっても、現れている。また、個人適応のないままに、集団適応するといういわゆる過剰適応の様相をしめすものもある。

筆者等は、幼児が集団生活の場に適応するという事は、個人適応が段階を追って達成された上で、集団適応も調和して発達したものであると考えながら、幼児を観察する中で検討を重ねてきた。その中で、このような適応というものが順調に進むものと、何らかの回り道をするものがみられ、その過程を検討していくことが必要となってきた。

これまでにも、幼稚園入園後に幼児が園生活に適応していく際に、その過程でいくつかの要因が関わっていることが示唆されている。一つは、入園前からの対人関係の変化を中心にして園生活への適応という観点から検討したもの (鈴木等, 1984) で、適応過程については教師に

よる行動評定により検討しており、「幼稚園入園前から仲間との関係をもっている子どもの方が、うまく幼稚園生活に入れる」としている。即ち、個人内要因としての「入園前からの仲間関係」、環境要因としての「入園時以前からの仲間が入園後も存在していること」が示されている。また、鎌田(1993)は、親子関係(母子分離の問題も含めて)を一つの要因と考えて入園当初の登園不安との関連において分析している。土谷(1991)は、適応を情緒性・自発性・認知性など8領域31項目の個人内要因に分け、教師による評定を用いており、入園前の遊ぶ力との関連を見いだしている。

これらのことから適応過程に影響を与える要因が様々ではあるが、個人内要因に着目しようとすれば、集団への関わりの初期の段階、すなわち、環境要因の影響ができるだけ少ない時期に、個人適応に影響する要因を明確にできるのではないかと考えられる。そのうえで、さらに、集団適応に関与するものを検討することが望ましいのではないだろうか。

以上のようなことから、ここでは、集団保育施設の一つである幼稚園への入園前と入園当初の幼児の状態から個人適応に及ぼす要因を検討することにより、その後の適応過程を明確にしていく資料としていくことを目的とする。

方 法

入園当初の幼稚園生活への適応状態とそれに関係していると予想される幼稚園入園前後の幼児の様子を、母親に尋ねる質問紙調査(A)と、それらの中で特に適応が低いとして抽出された幼児の適応に関しての担任教師と母親の印象の一致度、及び対象児の入園後1年間の園生活の経過を尋ねる項目を設定し、担任教師に質問紙調査(B)を行った。

A. 母親に対する質問紙調査

下記のような対象に対して各幼稚園の担任を経由して質問紙による調査を行った。

1. 調査期日 1993年10月
2. 調査対象 名古屋市内私立幼稚園2園(N園・K園)の3歳児クラス、4歳児クラス在園児の母親。
配布数402票。回収数388票(回収率 96.5%)。

3. 分析対象 4歳児クラスには、1993年4月に3歳児クラスより進級した幼児と、新たに入園した幼児とが含まれているので、本研究では進級児を除いた幼児、即ち入園後7ヶ月以内の幼児に関する回答(310票)のみを分析の対象とした。

対象の内訳は、Table 1に示す。

入園時年齢	男児	女児	total	平均月齢	(range)
3 歳	93	100	193	49	(42-53)
4 歳	57	60	117	59	(54-65)
	150	160	310		

(人)

4. 調査項目

1) 登園時の様子に関する項目

幼児がどの程度登園に不安を抱いているかをみるために、幼稚園入園後約1ヶ月間と7ヶ月後の登園時の様子について回答を求めた。「喜んでいく」・「泣いて嫌がる」・「親から離れ

ない」の3項目について、それぞれ「いつも」・「時々」・「ない」の3件法で回答を求めた。得られた回答について、「いつも喜んでいく」「泣いて嫌がることはない」「親から離れないことはない」に各2点を与え、反対に「喜んでいくことはない」「いつも泣いて嫌がる」「いつも親から離れない」は0点とし、「時々〜」は各1点を与え、3項目への回答の合計が0点から6点になるように得点化して集計した。この点数を登園時安定得点とした。

2) 幼稚園での経験を母親に報告する事に関する項目

幼児が、幼稚園で経験したことを家庭に帰ってから、母親にどの程度話すかということは、幼稚園で何もしていないように見えても、間接的な体験として得ているものがあるかどうかを確認することになる。そのため、この項では、幼児が帰宅後母親にどのようなことをどの程度積極的に話すかを幼稚園入園後約1ヶ月間と7ヶ月後の両時期について尋ねた。質問項目は「友達のことについて話す」・「先生のことについて話す」・「園での出来事について話す」・「園でならなかったことをする」の4項目であり、各項目に対してそれぞれ「いつも」・「時々」・「聞けば話す」・「ない」の4件法で回答を求めた。各回答に対して「いつも」に3点から「ない」に0点まで重みづけをし、12点から0点までに分類し、これらを伝達得点とした。

3) 入園前(入園までの約半年間)の遊び相手に関する項目

幼児が、入園前に仲間関係をどの程度もっていたかということは、入園直後の適応に影響する個人内要因であると予測されるので、一人遊び、親子だけの遊び、集団での遊びがどのような割合で経験されていたかを尋ねた。質問項目は「一人で遊ぶことは」・「子どもだけで2人で遊ぶことは」・「子どもだけで3人以上で遊ぶことは」・「親子だけで遊ぶことは」の4項目であり、それらに対して各々「多い」・「時々」・「ない」の3件法で回答を求めた。

4) 入園時期に関する項目

幼稚園入園にあたって考慮した要因とその決定について母親自身がどう評価しているかについて尋ねた。

①入園時期決定に当たって考慮したこと

入園時期すなわち3歳児入園とするか4歳児入園とするかを決定するときに、何に留意したか、その内容と程度が、園生活への適応にどのように影響しているかを検討するために以下の項目について質問を行った。

「入園させるべき年齢だと思った」・「集団に入れるちょうど良い頃だと思った」・「仲良しの友達と一緒に入園させたかった」・「本人が遊ぶ友達を欲しがった」・「誘われたので行かせようと思った」・「経済的なことを考えた」・「子どもと離れる時間が欲しかった」・「その他」の9項目について「その他」以外の8項目についてそれぞれ「はい」・「どちらでもない」・「いいえ」の3件法で回答を求めた。

②入園時期の妥当性に関する項目

決定した入園時期が妥当であったかどうかを、入園時の考えと入園7ヶ月後の考えについて尋ねた。

選択肢は、「早すぎると思っていた(または、思っている)」・「ちょうど良いと思っていた(または、思っている)」・「遅すぎると思っていた(または、思っている)」・「特に何も思わなかった(または、思っていない)」の4項目で単一選択を求めた。

5) 入園前の幼児集団参加経験の有無とその内容に関する項目

この質問項目については、別に稿を改めて、その実態と幼稚園生活への適応との関連について論ずる(望月・吉村, 1995)ので、本論では詳しく取り扱わない。

B. 担任教師に対する質問紙調査

調査Aで適応低群とされた69名の中からN園に在園する22名(内訳:3歳男児7名,3歳女児9名,4歳男児2名,4歳女児4名)について,幼稚園での適応について担任教師に回答を求めた。期日及び調査項目は下記のものであった。

1. 調査期日 1994年3月

2. 調査項目

1) 登園時の様子に関する項目

幼児の登園不安について,母親の印象との一致度をみるために,幼稚園入園当初約1ヶ月間とその後の登園時の様子について回答を求めた。「喜んで来る」・「泣いて嫌がる」・「親から離れない」の3項目について,それぞれ「いつも」・「時々」・「ない」の3件法で質問した。それぞれの回答について,「いつも喜んで来る」「泣いて嫌がることはない」「親から離れないことはない」に各2点を与え,反対に「喜んで来ることはない」「いつも泣いて嫌がる」「いつも親から離れない」は0点とし,「時々――」は各1点を与え,3項目への回答の合計が0点から6点になるように得点化して集計した。

2) 幼稚園生活の様子に関する項目

① 集団の場での活動項目

集団の場での活動について対象児がどの程度できているかを,入園当初約1ヶ月間とその後について尋ねた。「登園後の朝の支度がスムーズにできる」・「クラスの友達の前で話ができる」・「順番・ルールが守れる」・「クラスみんなで遊ぶゲームに参加できる」の各々について,「いつもできる」から「いつもできない」までの5件法で回答を求め,それらを,4点から0点に得点化して,活動得点(16点～0点)とした。

② 仲間遊びについての項目

自由時間にいつも一緒にいる友達はいますか」という問いに対して「はい(人位)」・「いえ」・「わからない」の中から単一選択,「自由時間にグループで遊ぶことはありますか」という問いに対して, a.中心になって遊んでいることが多い b.(中心ではないが)積極的に参加していることが多い c.中心的な子について遊んでいることが多い d.そばにいて見ていることが多い e.中心的な子にひっぱられて参加していることが多い 0.遊ばない のの中から単一選択を求めた。

③ 担任への話しかけに関する項目

対象児が担任に対してどの程度積極的に話かけるのかについて,入園当初約1ヶ月間とその後について,「毎日一度は話してくれる」・「時々話してくれる」・「聞けば話してくれる」「側に来るが話さない」・「話さない」・「覚えていない」の中から単一選択による回答を求め「覚えていない」を除いた5項目をそれぞれ4点～0点の伝達得点として集計した。

④ 対象児の印象

対象児の印象について,長島ら(1966)による対語の中から意欲性因子・情動安定性因子・感性因子として分類されたもののうち,幼児の行動の印象を表すのに適当と考えられる尺度9対を使用した。印象については,「活発な―不活発な」・「敏感な―鈍感な」・「明るい―暗い」・「安定な―不安定な」・「細かい―大まかな」・「強気な―弱気な」・「積極的な―消極的な」・「軽率な―慎重な」・「意欲的な―無気力な」の9項目について,5点尺度で回答を求めた。また対象児についての所見は自由記述で求めた。

結果と考察

1. 調査Aの各質問項目に対する回答結果

1) 入園前の仲間遊び

入園前に、どの程度の頻度で、子供同士の遊びを体験しているかを尋ねた結果は、Table 2のようであった。

ここで、着目したいのは、入園前に子どもだけ2人または3人以上で遊ぶことが「ない」という回答の数である。3歳前後の時期にいつも子ども以外つまりおとなの中だけで遊んでいた幼児が、入園と同時におとな1名に対して子ども20名以上の集団の中での生活を始めているということである。このことが、適応とどう関わっているかは後述するが、この数値からは、いつも母親に代表されるおとなの保護のなかで遊ぶ幼児の姿が浮かんできている。

	入園前の仲間遊び			N
	多い	時々	ない	
一人で遊ぶこと	135	155	19	1
子供だけ二人で遊ぶこと	111	165	33	1
子供だけ三人以上で遊ぶこと	74	170	65	1
親子だけで遊ぶこと	99	193	16	2

(人)

2) 入園時期の決定要因と評価

入園時期の決定に当たっては、Table 3 に示すような要因を考慮しながら決定している。また、決定にあたって、その時期でちょうど良いと思っていたかどうか、入園後その判断が変わっているかどうかは、Table 4 に示す通りであった。

入園時期の決定にあたっては、子どもの気持ち・態度に母親が応える形の要因と、子どもの発達を考慮していることが読みとれる。また、3歳あるいは4歳の時期に入園を決定したことに対する母親自身の評価は、入園前と7ヶ月経過後とでは、無変化のものが多いが、早すぎる・遅すぎると思いながら入園させても、結果的にはちょうど良かったとするものもある。どの点からそう判断したのかを、さらに詳細に調査すると決定要因以外にも子どもの入園に対する母親の考えが明確になったかもしれない。

決定要因	考えた	少し考えた	考えない	N
本人が行きたがった	86	54	166	4
友達と一緒に入園させたかった	87	79	143	1
遊ぶ友達を欲しがった	156	91	60	3
子供と離れた自分だけの時間が欲しかった	114	82	112	2
集団に入れるよい頃だと思った	275	29	6	0
経済的な理由を考えた	41	76	191	2
入園させるべき年齢だと思った	220	69	21	0
誘われたので	8	31	270	1

(人)

Table 4 入園時期の決定に関する評価

入園前		7ヶ月後	
早すぎる	41	早すぎた	6
		ちょうど良かった	35
		遅すぎた	0
ちょうど良い	236	早すぎた	2
		ちょうど良かった	227
		遅すぎた	7
遅すぎる	15	早すぎた	0
		ちょうど良かった	12
		遅すぎた	3
何も考えない	16	ちょうど良かった	10
		何も考えない	6
N	2	ちょうど良かった	2

(人)

3) 園生活への適応について

幼稚園生活への適応の程度を幼児が母親に対して示している項目から、集計した登園時安定 (AP) 得点と伝達 (CP) 得点を、入園当初 (I) と7ヶ月後 (II) の得点分布と平均にして、Table 5, 6 に示した。平均点は AP 得点・CP 得点いずれも有意に高くなっている (AP: $t(309) = 11.40$, $P < .0001$ CP: $t(309) = 18.46$, $P < .0001$)。分布では AP 得点は特に3歳児で入園当初の低得点が多く、登園時の安定には年齢の低さが影響している部分が大きく、4歳児の得点の低い幼児にも個人内要因に違いがあることが予想される。

CP 得点においては、得点分布に男女差がみられ他の場面における伝達量とも比較し検討する必要があるが、性差としてとらえることができる。

Table 5 登園時安定得点 (A P) の分布

年齢・性別	時期	6	5	4	3	2	1	0	total	\bar{x}
3歳・男児	I	38	13	11	14	8	5	4	93	4.30
	II	64	19	3	7	0	0	0	93	5.50
3歳・女児	I	46	16	9	12	7	4	6	100	4.46
	II	82	10	4	3	1	0	0	100	5.69
4歳・男児	I	31	10	7	4	3	2	0	57	4.98
	II	45	8	2	0	2	0	0	57	5.65
4歳・女児	I	32	13	6	3	3	1	2	60	4.95
	II	43	12	4	1	0	0	0	60	5.62
計	I	147	52	33	33	21	12	12	310	4.46
	II	234	49	13	11	3	0	0	310	5.61

I : 入園当初
II : 7ヶ月経過後

(人)

幼稚園生活への適応について (1)

Table 6 母親への経験伝達得点 (C P) の分布

年齢・性別		12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	total	\bar{x}
3歳・男児	I	4	3	4	3	6	7	14	15	17	5	6	3	6	93	5.40
	II	17	8	7	18	24	6	7	2	2	2	0	0	0	93	8.86
3歳・女児	I	8	1	4	8	21	13	12	12	5	9	5	2	0	100	6.69
	II	34	6	15	17	18	5	3	1	0	0	0	0	1	100	9.79
4歳・男児	I	6	1	3	3	4	6	7	6	11	5	2	1	2	57	6.14
	II	8	4	8	10	12	3	5	2	3	2	0	0	0	57	8.51
4歳・女児	I	8	5	5	4	10	5	5	9	6	0	1	1	1	60	7.57
	II	14	9	8	7	15	4	2	1	0	0	0	0	0	60	9.58
計	I	26	10	16	18	41	31	38	42	39	19	14	7	9	310	6.37
	II	73	27	38	52	69	18	17	6	5	4	0	0	1	310	9.24

(人)

さらに登園時安定得点が低く (4点以下) かつ伝達得点が低い (6点以下) ものについては低適応群 (L群) とし, 登園時安定得点が高く (5点以上) かつ伝達得点が高い (7点以上) のものについては高適応群 (H群) とし, その他を中程度群 (M群) として示したものが Table 7である。

Table 7 幼稚園生活への適応の変化

適応	入園直後			7ヶ月後			
	3歳児	4歳児	小計	適応	3歳児	4歳児	小計
H群	50 (25.9)	44 (37.6)	94 (30.0)	H群	50	44	94
M群	93 (48.2)	54 (46.2)	147 (47.4)	M群	21	15	36
L群	50 (25.9)	19 (16.2)	69 (22.3)	L群	1	0	1
全体	193 (100.0)	117 (100.0)	310 (100.0)	その他	0	1	1
				全体	193	117	310

(人)(%)

これらの結果から, 分析すると入園直後の時期 (約1ヶ月間) については, 3歳児入園児よりも4歳児入園児の方が適応が高いということ ($\chi^2=6.23$ $df=1$ $p<.05$), 男児よりも女児の方が適応が高いということ ($\chi^2=11.28$ $df=1$ $p<.001$) がいえる。

入園当初に比べて, 適応の程度が下降しているものはなく, 全体に上昇の傾向にある (4歳児48.7%, 3歳児62.7%上昇) ことがわかる。これらは, 他の研究結果とも一致するものであるが, L群・M群に無変化のものが37名 (11.9%) あることについては, 今後検討の余地がある。

4) 入園前の幼児の要因と入園当初の適応との関係

入園当初の適応は、個人内要因と大きく関連していると考えられているが、それらと入園前の状況との関連で検討してみる。

① 友達との遊び経験と適応

適応H群とL群とを比較すると、入園前に「3人以上で遊ぶこと」がH群に多く見られた($\chi^2=3.50$ df=1 p<.10)。

② 入園時期の決定要因と適応

入園時期の決定にあたって本人の意思が考慮されていたかどうかと、入園後の適応との関係を見ると、本人の意思を考慮している方が、していないものより適応が良かった($\chi^2=4.33$ df=1 p<.05)。また、母親が集団に入れるべき年齢であると判断して入園時期を決定している場合の方が適応が高かった($\chi^2=9.12$ df=1 p<.01)。

③ 兄弟が通っている同じ幼稚園に入園する場合、特に適応が良かった($\chi^2=8.70$ df=1 p<.01)。

以上の結果から、入園前の仲間遊び経験、幼稚園入園に対する母親の考え方などが、入園当初の適応に大きく影響することが明確になった。幼児個人のもつ要因としての経験や、母親が幼児の実態にあわせようとする姿勢が入園後の幼稚園生活への適応において重要であるといえる。

2. 調査Bの各質問項目に対する回答結果

入園当初適応低群であった幼児22名について担任教師に調査した結果を調査Aでの適応得点と共に Table 8 に示す。

Table 8

		調査A 適応得点				調査B 結果							
		A P		C P		A P		C P		活動得点		仲間遊び	印象
		年齢・性	入園直後・7ヶ月後	入園直後・7ヶ月後	入園直後・その後	入園直後・その後	入園直後・その後	入園直後・その後	入園直後・その後				
case1	4・男	3	6	1	4	3	6	4	4	7	14	b	3.9
case2	4・男	1	5	5	8	1	6	2	4	5	12	a	3.6
case3	4・女	4	5	5	5	2	5	1	4	6	10	b	3.2
case4	4・女	2	6	2	7	4	6	2	4	9	14	c	3.0
case5	4・女	2	5	1	8	3	6	2	2	8	14	c	3.1
case6	4・女	4	5	4	7	1	6	2	4	8	13	b	2.8
case7	3・男	2	5	2	5	4	5	3	2	14	16	b	3.1
case8	3・男	3	6	4	7	0	5	2	4	4	12	b	3.8
case9	3・男	2	5	6	10	2	6	3	4	9	15	c	2.4
case10	3・男	3	6	4	8	4	6	2	2	5	11	d	3.4
case11	3・男	1	5	1	9	2	4	3	4	11	14	b	3.3
case12	3・男	0	3	6	12	3	5	1	2	13	16	b	2.4
case13	3・男	2	5	2	8	2	6	2	4	4	12	b	3.2
case14	3・女	0	6	4	11	0	5	4	4	8	13	d	3.0
case15	3・女	3	6	1	7	0	6	2	4	4	11	b	4.0
case16	3・女	2	6	5	12	2	6	2	3	8	14	0	2.3
case17	3・女	2	5	6	12	3	6	4	4	8	14	a	3.0
case18	3・女	3	6	3	5	4	5	0	2	13	14	e	2.1
case19	3・女	4	6	5	12	0	6	1	4	1	9	0	3.3
case20	3・女	2	6	3	10	5	5	3	3	13	16	b	3.2
case21	3・女	1	6	2	11	0	6	3	4	5	14	b	3.0
case22	3・女	0	3	3	8	0	6	2	4	3	12	a	3.8

それぞれの、結果からみると入園当初は家庭でも、幼稚園でも適応の程度が低いと考えられていた対象児が、時間の経過と共に適応の程度を上昇させているのがわかる。担任教師の所見等から個別に見ると、case3では親しい友人が一名できることがきっかけとなり、幼稚園での適応が上昇したことが報告されている。また、case5では、入園直後から担任教師の近くにいたり、手をつないだりしていることにより、安定している日々が続き、集団での遊び等には参加できなかったが、3学期以降に徐々に友達との関わりを増加させ、幼稚園での生活への本来の適応、つまり自己を開示しながら周りとの交流も深めた内外の適応を果たしていったと考えられる。さらにcase19は、入園後から全く自発的な行動のないまま、1日中傍観の状態であったり、給食やおやつも口にしない日が続いた例である。この場合、担任教師との物理的な距離を少しずつ縮めたり、家庭から持ってきたものを手に持っていることにより自分の内的な安定を図っていたが、徐々にそれらが必要のない状態へと変化していった。

このように個別に見てみると、入園当初の適応には、入園前の個人内要因としての条件がかなり影響していること他に、その後の適応の変化には、仲間関係や教師（保育者）との関係が深く関わり、それらは、依存の問題とも関係しているように思われる。幼児期の依存対象や依存行動の変化については、高橋（1969）に詳しいが、適応自体への影響を検討していくことが必要であると考えられる。

まとめ

本論では、幼稚園への入園当初の時期にさまざまな様相をみせる幼児の内的外的適応の意味について、これまで積み重ねられているものと比較検討しながら、影響要因について考えてみた。

特に幼児の幼稚園入園直後の園生活の適応という場面では、入園前の幼児前期での仲間経験や入園時の年齢、性が関与していることが明確になった。また、初期の段階では適応の低さを見せた幼児においても、徐々に上昇する傾向があること、家庭での母親の印象と担任教師の印象がほぼ一致していることも明らかになった。個別検討からは、友達との関係を含んだ幼児の対人関係の変化により適応が変化していくことが検討されたが、個々の幼児の認知発達や言語発達など集団の中で内的外的適応を果たしていくための要因も検討する必要がある。

今後残された課題は、適応を個人内要因・環境要因に限定せず、関係性の中でとらえていくことや、3歳未満児の保育における適応についても明らかにしていくこと、調査Bで明らかになったような適応の高まる過程を、さらに多くの事例にあたり詳しく検討していくことであると思われる。

文 献

- 平井信義・千羽喜代子他. (1974). 3歳児の集団教育施設における適応について—第1報—(その1) 集団適応の過程とその個人差. 日本保育学会第27回大会研究論文集. 2-705
- 鎌田次郎. (1993). 幼稚園児の親子関係と社会性. 関西女子短期大学紀要3. pp.53-66
- 望月久乃・吉村智恵子. (1995). 幼稚園生活への適応(2). 名古屋女子大学紀要(人文・社会編)41. pp.161-168
- 森上史朗. (1980). 個人適応と社会適応. 『保育のための乳幼児心理事典』. 森上史朗編. 日本らいぶらり, pp.148-149
- 長島貞夫・藤原喜悦他. (1966). 自我と適応の関係についての研究(1). 東京教育大学教育学部紀要12.

pp.85-91

- 佐伯 胖・刑部育子. (1994). 幼児の集団への参加における関係構造の分析 (1). 日本教育心理学会第36回総会発表論文集. pp.145-146
- 柴田幸一. (1990). 母子分離不安と3歳未満児保育. 『母子関係と集団保育』. 金田利子等編. 明治図書
- 鈴木ますみ・永田千春. (1984). 新入園児の幼稚園への適応過程. 日本保育学会第37回大会研究論文集. pp.398-399
- 高橋恵子. (1969). 子どもの社会化過程と依存性. 児童心理学講座 8 人格の発達. 桂広介等監修. 金子書房. pp.91-136
- 土谷みち子. (1991). 修了生調査から見る遊ぶ力の発達ー3歳時期の遊ぶ力と幼稚園生活での適応との関係ー, 家庭教育研究所紀要13. pp.151-160